

令和 6 年 4 月 23 日現在

機関番号：33905

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K19292

研究課題名(和文) 訪問看護師を対象とした難聴高齢者支援研修プログラムの構築とその効果

研究課題名(英文) Development and Effectiveness of a Training Program for Visiting Nurses to Support the Elderly with Hearing Loss

研究代表者

鍋島 純世(Nabeshima, Sumiyo)

金城学院大学・看護学部・講師

研究者番号：60634631

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「訪問看護師を対象とした難聴高齢者支援研修プログラム」の構築とその効果を明らかにすることである。訪問看護師の難聴高齢者との会話における困難で明らかになった内容をふまえて(本研究事前調査)、加齢性難聴の理解、補聴器の理解、難聴高齢者との効果的なコミュニケーションの理解と習得が可能である講義と演習から構成された「難聴高齢者支援研修プログラム」を試作した。プレテスト実施後、12施設の訪問看護ステーションに所属する訪問看護師57名に対し、研究調査を実施した。結果、難聴に関する知識・技術・行動は有意に向上し介入による知識・技術の獲得および行動変容が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「訪問看護師を対象とした難聴高齢者支援研修プログラム」の構築とその効果を明らかにすることを目的として実施した。「難聴高齢者支援研修プログラム」を導入した訪問看護師の知識・技術・行動は有意に向上し、構築した「難聴高齢者支援研修プログラム」が効果的な内容であることが明らかになった。高齢化と共に、加齢性難聴と共に生活する在宅療養者も増加することが予測される中、訪問看護師の難聴に関する知識や技術が向上し、難聴に対する看護ケアが促進されたことは、難聴高齢者の当人のみでは難航している補聴行動の促進、ひいては難聴高齢者の抱える精神的苦痛や認知機能低下の軽減に貢献できる介入といえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to establish a "training program for visiting nurses to support the elderly with hearing loss" and to determine its effectiveness. Based on the difficulties identified by visiting nurses in communication with the elderly with hearing loss (pre-test of this study), a prototype "training program to support the elderly with hearing loss" consisting of lectures and exercises was developed to enable understanding of age-related hearing loss, understanding of hearing aids, and understanding and mastery of effective communication with the elderly with hearing loss. After the pretest was conducted, a research survey was conducted on 57 visiting nurses belonging to 12 home health care nursing stations. Results showed that knowledge, skills, and behaviors related to hearing loss were significantly improved. Knowledge and skill acquisition and behavior change due to the intervention were confirmed.

研究分野：看護学

キーワード：難聴 訪問看護 高齢者 プログラム

1. 研究開始当初の背景

我が国の加齢性難聴のある高齢者数は1500万人超と算定され、精神的健康度や認知機能の低下、抑うつなど加齢性難聴による負の影響が明らかになってきた。災害時の難聴高齢者の情報収集の手段は、視覚情報が活用されるが、災害直後は視覚的情報が遮断する可能性があり、難聴高齢者が自身で情報収集や避難判断を下すには、聞こえの能力を確保しておくことが財産や命を守るためにも必須の条件であるといえる。その難聴に有効とされている補聴器の装用率は低く、補聴器装用の適用である中等度難聴以上の約6割が補聴器非使用者と報告されている。しかし、多くの高齢者が、補聴器適応者であっても補聴器適合について検討されていない実態があり、その一因として難聴高齢者に関わる医療従事者の知識不足が挙げられており、看護師を含む介護施設スタッフの約7割は難聴の知識を持っていないなど報告され、医療従事者の難聴ケアに関する知識や認識は十分ではない。超少子高齢社会を見越して社会保障制度を持続させるために地域全体で支えあうことを目的としている地域包括ケアシステムの中で、本人の思いに沿った日々の生活を支える効果的な在宅看護が期待されている。地域の高齢者と日常的に関わる訪問看護師が、加齢性難聴に興味関心を持ち、的確な難聴の把握や耳鼻科への受診行動の促進の一端を担うこと、さらに、加齢性難聴のある高齢者の思いに沿った看護援助に従事することは、難聴による様々な二次障害の予防に繋がるといえる。

2. 研究の目的

そこで、本研究は訪問看護師の的確な難聴の把握および看護援助を促進するための「訪問看護師を対象とした難聴高齢者支援研修プログラム」の構築とその効果を明らかにすることとした。

3. 研究の方法

< 難聴高齢者支援研修プログラムの構築 >

訪問看護師の難聴高齢者との会話における困難で明らかになった内容をふまえ（本研究事前調査）、加齢性難聴の理解、補聴器の理解、難聴高齢者との効果的なコミュニケーションの理解と習得が可能である講義と演習から構成された「難聴高齢者支援研修プログラム」を試作した。プレテスト実施し、プログラムの内容検討およびアンケート調査項目の修正を実施した。

< 難聴高齢者支援研修プログラムの効果検証 >

難聴高齢者支援研修プログラムの効果検証を行う枠組みは、Kirkpatrick(1959)の4段階モデルのうち、レベル1~3を使用し、研修直後において、レベル1の満足度およびレベル2の理解度として、研修項目（講義および演習）で構成された内容の質問紙にて調査した。レベル3の行動変容については、研修内容を実践したと思われる約3か月後に調査し、研修項目（演習）の実施状況をアンケート項目として、レベル2で調査した質問項目と同様にすることで、比較による行動変容を確認した。

12施設の訪問看護ステーションに所属する訪問看護師57名に対し、研究調査を2021年4月~2022年3月に実施した。研究デザインは1群介入前後比較調査とし、プログラム受講3か月前、プログラム受講直前、プログラム受講直後、プログラム受講3か月後の合計4回のアンケートを実施した。調査項目は、基本属性、プログラム内容から抽出した知識（難聴の病態生理・補聴器に関する知識・難聴スクリーニングに関する知識など）・技術（難聴スクリーニングの方法）・行動（難聴スクリーニングの実施・補聴器に関する受診促進や情報提供・難聴高齢者とのコミュニケーションの実施など）に関する項目とした。分析方法は、「知識」「技術」は介入前後、「行動」は介入前と3か月後に効果を確認するためにMcNemar検定を行った（ $p < 0.05$ ）。

< 難聴高齢者支援研修プログラムの更なる内容検討 >

「難聴高齢者支援研修プログラム」の更なる内容検討のため、訪問看護師における高齢者の難聴ケアの実態について全国調査を実施した。厚生労働省が出している全国47都道府県の訪問看護ステーション比率に合わせて、一般社団法人全国訪問看護事業協会に登録する訪問看護ステーション7404施設（2022年8月時点）の中から200施設を無作為抽出した。

調査対象者は、研究の承諾が得られた訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師とした。各施設の管理者を通して調査対象者である施設所属の訪問看護師全員1361名に対しWeb調査回答依頼を郵送し、Web調査を2022年10月~11月に実施した。調査項目は、基本属性、難聴ケアに必要な知識（加齢性難聴の病態、簡便な難聴スクリーニング（指こすり法、電子体温計の終了音聴取法、ささやき音聴取法）、耳垢除去の方法、補聴器に関する知識（補聴器の種類、メンテナンスやクリーニング等）、聞き取りやすい環境調整や会話技術）、難聴ケアの実施状況（アセスメント、ケア、多職種連携）、難聴ケアに関する困難感とした。分析方法は、各項目ごとに割合を算出した。

4. 研究成果

< 難聴高齢者支援研修プログラムの効果検証 >

結果、欠損値を含む 19 名を除外し、38 名を分析対象とした。女性 29 名 (76.3%)、平均年齢 38.3 ± 10.0 、訪問看護師経験 4.0 ± 3.8 年であった。「知識」は病態生理、補聴器、難聴スクリーニング、難聴高齢者への会話や情報提供について有意に向上し、「技術」はスクリーニングの手順において有意に向上しており、プログラム介入による知識・技術の習得がみられた。「行動」は、スクリーニングの実施、補聴器相談医への紹介、緊急情報システムの情報提供において有意に向上し、介入による行動変容が確認された。訪問看護師に対する「難聴高齢者支援プログラム」の提供は難聴や補聴器に関する知識・技術の習得を促し、簡便なスクリーニングや難聴高齢者への情報提供の継続的な実施につながる効果的なものであった。

< 難聴高齢者支援研修プログラムの更なる内容検討 >

訪問看護師 1361 名を対象に、難聴ケアの実態として知識、アセスメント、ケア、多職種連携、困難感について Web 調査を実施した。結果、1361 名の訪問看護師のうち 158 名 (回収率 11.6%) から回答が得られた。そのうち質問項目すべてに回答が入力されている 128 名を有効回答とし (有効回答率 81.0%)、各項目の割合を算出した。対象者の年齢は 46.4 ± 9.1 歳であった。看護師経験年数は 21.3 ± 9.4 年、訪問看護師経験年数は 8.8 ± 7.7 年であった。性別は女性が 123 名 (96.1%) で、110 名 (85.9%) が同居していた。難聴や補聴器に関する研修の受講経験は 123 名 (96.1%) が「なし」と回答した。難聴ケアの知識は、全項目で 60~90% の訪問看護師がもっていなかった。アセスメントは全項目で 50~100%、ケアは 1 項目を除くと 40~100% の訪問看護師が実施しておらず、全般的に低かった。多職種連携は全項目で 60~90% の訪問看護師が実施していなかった。困難感は、難聴の程度のアセスメント (約 80%)、耳垢の除去 (約 73%) 実施時の困難感が高かった。訪問看護師に対する難聴ケア教育の必要性が強調された共に、「難聴高齢者支援研修プログラム」にさらに含めるべき具体的内容が明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 鍋島純世、又吉忍	4. 巻 9
2. 論文標題 訪問看護師の補聴器推奨の現状と難聴高齢者との会話における困難と工夫について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本在宅看護学会誌	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nabeshima Sumiyo, Ando Yukako	4. 巻 43
2. 論文標題 The Actual Situation of Hearing Loss Care For Older Adults by Visiting Nurses	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Japan Academy of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 408 ~ 418
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.43.408	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Sumiyo Nabeshima
2. 発表標題 Effects of a support program for the elderly with hearing loss on visiting nurses
3. 学会等名 The 26th East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------